

原著論文

地域母子支援実習による青年期看護大学生の親性準備性の変化

Changes in readiness for parenthood among adolescents undergraduate nursing students after training that incorporates experiences with maternity and childcare in the community.

外村 晴美¹⁾

TONOMURA HARUMI¹⁾

要 旨

目的：母性看護学実習の一環である地域母子支援実習が看護学生自らの親性準備性にもたらす変化と属性との関係を明らかにする。

対象と方法：看護系大学3年次2017年度60名、2018年度65名を対象に地域母子支援実習前後の親性準備性の縦断調査を行った。地域母子支援実習前後の親性準備性尺度の22項目の合計得点と下位尺度である「乳幼児への好意感情」、「育児への積極性」得点を属性ごとに実習前後で比較した。

結果：地域母子支援実習前の親性準備性得点は、実習後は有意に高く変化した。属性では男子学生、実習開始前より高い親性準備性得点である学生は実習後に高くなったが、有意な変化はなかった。下位尺度では、「乳幼児への好意感情」得点は全属性で有意に高く変化した。が、「育児への積極性」得点は女子学生以外は有意に変化しなかった。

結論：地域母子支援実習は看護学生の親性準備性の乳幼児の好意感情は高くするが、育児への積極性を高くするには至らないことが示唆された。属性では学生の性差、子どもや母性看護への興味の有無に着眼した関わりが必要である。

キーワード：親性準備性 母性看護学実習 子育て支援

I. 緒言

母性看護学実習は、従来、周産期病院施設が主となる実習場所であった。しかし、産科施設の減少や看護系大学の増加、助産実習と実習施設が重なることによる周産期病院施設の実習確保が困難な状況を踏まえ、2015年に厚生労働省より病院以外の施設も実習施設に含めることができることが改めて周知された¹⁾。A大学の母性看護学実習は周産期病院実習と地域母子支援実習を組み合わせた実習展開であり、生み育てる女性への健康支援における基礎的能力を養うとともに、自らの親性を高めることも目標としている。

地域母子支援実習は、周産期の看護に限定されがちな看護学生にとり、子育てにおける社会性と親性

を育む貴重な機会となる。周産期病院実習は、ダイナミックに日々変化する分娩後の母児を対象に受け持つが、地域母子支援実習では、6か月～3歳児を育てる母親・家族と遊びを通して関わる。この時期の母親は、現実の子どもを受け入れ、自己の生活を子どものいる生活に適應させ、乳児期・小児期まで継続する関係を築いていく時期であり²⁾、看護の初学者である学生にとり、親性を涵養に育むことができる機会である。また、地域母子支援実習と周産期病院実習との統合的な学修は、看護学教育コア・カリキュラム・モデルにある家族発達支援や社会変遷に対応できる多職種連携力などを醸成するものである³⁾。

親性準備性とは「子どもの特性・成長発達を知る、

¹⁾ 四條畷学園大学看護学部

¹⁾ Shijonawate gakuen University School of Nursing

乳幼児への好意感情の高まり、妊娠・出産・育児への関心や肯定的認識、性役割を受容することで、発達段階上から、近い将来に親になろうとしている年齢段階、すなわち青年期から本人またはパートナーが妊娠するまでの期間において、段階的に形成される親としての役割を果たすための資質⁴⁾と定義されている。しかしながら、少子化・核家族化、地域性の希薄化は、育児行動の観察や体験など養育や育児について学習する機会がない環境をつくり、親としての役割や行動に問題が生じる現状があり、青年期の発達段階における親性育成の必要性が指摘されている⁵⁾。その育成の取り組みは様々な形で行われ、ボランティアなどの子育て経験⁶⁾、思春期保健福祉体験学習事業⁷⁾、幼児教育学科や看護学科の小児看護学・母性看護学の分野における実習経験が親性準備性を高くすることが報告されている^{8)~12)}。しかし、看護学生がもつ属性による親性準備性の変化を研究したものはない。

そこで、親性を獲得する重要な時期にある看護学生に対し、母性看護学における地域母子支援実習という展開法が少ない中、その実習による親性準備性の属性による変化を明らかにしたいと考えた。近い将来看護師となる看護学生の親性準備性を高めることは、今まで家族に世話をされる側から、する側のことを考える機会となり、個人だけでなく家族を含んだ看護を考える一助となる。また、その後展開される1週間の周産期病院実習では母子の身体変化の理解が中心となる学生にとって、母親役割獲得過程を考える機会となり効果的な周産期病院実習につながると考える。

II. 目的

母性看護学実習の一環である地域母子支援実習が看護学生自らの親性準備性にもたらす変化と属性との関連を明らかにする。

III. 用語の定義

地域母子支援実習：子育て支援をする“子ども・子育てプラザ”や“つどいの広場”での実習とする。

親性準備性：佐々木¹³⁾による親性準備性尺度の「乳幼児への好意感情9項目」、「育児への積極性13項目」の合計22項目の得点より得られた親としての役割を遂行するための資質とする。

青年期：厚生労働省(健康日本21)¹⁴⁾の区分15歳～25歳までより、25歳までの大学生とする。

属性：基本属性のうち親性育成に影響すると言われている“性別”“弟または妹の有無”“身近に3歳までの幼い子どもの有無”“中学や高校での保育体験実習で遊んだ経験の有無”“乳幼児の世話のボランティアで遊んだ経験の有無”“子どもへの興味の有無”と看護学生として親性育成に影響すると考えられる“母性看護への興味の有無”の7項目とする。

IV. A 大学における母性看護学実習における地域母子支援実習

地域母子支援実習は5～6名の学生を1グループとし、周産期病院実習の前に3日間実施している。学生は、事前オリエンテーションを受け、地域の特長、母子との関わり方、母子を対象とした健康教育を計画し、練習して臨む。1日目は高齢者や日雇い労働者が多く子育て世帯の少ない地域、NPO法人、助産所の運営するつどいの広場3施設の中の1施設の見学を行う。2～3日目は社会福祉法人や一般財団法人が運営する4地域の子育てプラザのうち、1地域の施設見学後、子育てプラザの助産師・保育士・社会福祉士の役割や地域の特徴など対話を通して学ぶ。また、歌や踊り、劇などで子どもの気持ちをひきつけながら、母子への健康教育の実施、6か月～3歳児を育てる母親・家族と接し、見と遊びながら、親子の関係性、子育てに関する生の声を聴く。実習指導は担当教員1名が各グループを担当し、日々の振り返りとして実習終了前に毎日30分間のカンファレンスを行う。

V. 研究方法

1. 研究デザイン

質問紙を用いた縦断調査

2. 研究対象

地域母子支援実習を履修したA大学青年期男女看護学生2017年3年次88名、2018年3年次84名。同意書と実習前後ともに調査票が提出された2017年度61名(回収率は69.3%)、2018年度65名(回収率77.4%)のうち、25歳以上の学生、出産や育児経験のある学生1名を除外した2017年60名(男

性 16 名女性 44 名、年齢 21 ± 1 歳)、2018 年 65 名 (男性 11 名、女性 54 名、年齢 21 ± 1 歳) を分析対象とした。

3. 調査期間

2017 年 8 月～2018 年 12 月

4. 調査方法

無記名自記式質問紙を用い、実習開始約 1 か月前に実施した全体オリエンテーションで基本属性に関する質問紙および親準備性尺度¹³⁾に回答後、厳封の上、専用提出ボックスへの投函を依頼した。また、実習前後の比較ができるように、実習グループ毎に行う周産期病院実習前の地域母子支援実習最終学内日に親準備性尺度¹³⁾を同様の方法で収集した。各質問用紙には共通の番号を付した。

5. 調査内容

1) 対象者の基本属性

性別・年齢・きょうだい構成・3歳までの幼い子どもが身近にいるか・中学や高校での保育体験実習で遊んだ経験・乳幼児の世話のボランティアで遊んだ経験・母性看護への興味・子どもへの興味について回答を得た。

2) 親性準備性尺度¹³⁾

佐々木¹³⁾が青年期男女に使用するにあたり母性準備性尺度¹⁵⁾を開発者の承諾のもと一部内容変更、名称変更した尺度である。「乳幼児への好意感情 9 項目」、「育児への積極性 13 項目」の合計 22 項目から構成され、信頼性と妥当性が確認されている¹³⁾。選択肢は「全くあてはまらない」1 点～「非常にあてはまる」5 点の 5 段階評定法とし、得点範囲は 22 点～110 点(乳幼児への好意感情 9 点～45 点、育児への積極性 13 点～65 点)であり、得点が高いほど親性準備性が高いと判定する。本研究での Cronbach の α 係数は尺度全体で 0.92、下位尺度の「乳幼児への好意感情」0.97、「育児への積極性」0.79 であった。

尺度は開発者に承諾を得て使用した。

6. 分析方法

2 学年の学生の属性を比較するために基本属性を Fisher の正確確率検定を行った。地域母子支援

実習前後の親性準備性尺度の合計得点、下位尺度の「乳幼児への好意感情」、「育児への積極性」得点の変化を学生の属性別に wilcoxon の符号付順位検定を実施した。統計学的有意水準は両側検定にて 5% とした。分析には SPSS Ver.25.0 を使用した。

7. 倫理的配慮

対象者に文書と口頭で研究目的、意義、内容 (方法・期間)、参加を中止あるいは拒否する権利、拒否しても成績評価に関係しないこと、プライバシー保護の権利が保障されていることを説明し、同意書の提出をもって同意を得た。本研究は A 大学倫理審査委員会承認を得た。

VI. 結果

1. 基本属性

基本属性の結果を表 1 に示す。対象者の属性は男性 27 人 (21.6%)、女性 98 人 (78.4%) であった。弟妹がいる学生は 64 人 (51.2%)、身近に 3 歳までの子どもがいる学生は 20 人 (16.0%)、中学校や高校での保育体験実習で遊んだ経験のある学生は 46 人 (36.8%)、乳幼児の世話のボランティアで遊んだ経験のある学生は 35 人 (28.0%) であった。母性看護学に興味がある学生は 77 人 (61.6%)、子どもへの興味は 92 人 (73.6%) の学生がもっていた。2 学年の対象学生の間で、属性に有意な差はみられなかった。

2. 実習開始前の親性準備性得点

実習開始前の親性準備性得点は、ボランティアで遊んだ経験がある学生がもっとも高かった (中央値 94 点)。つぎに、弟または妹のいる学生 (中央値 92 点)、身近に 3 歳までの子どもがいる学生 (中央値 92 点)、中学や高校での保育体験実習で遊んだことのある学生 (中央値 92 点)、母性看護への興味がある学生 (中央値 92 点)、子どもについての興味がある学生 (中央値 92 点)、は同得点であった。各属性の経験や興味のある学生は、普通・なしの学生に比べて親性準備性得点が高かった。最も得点が低い属性は子どもに興味があつう・ない学生 (中央値 70 点) であった。

表 1 対象者の基本属性

	人数 (%)			p 値
	全体 n=125	2017年度学生 n=60	2018年度学生 n=65	
性別				
女子学生	98 (78.4)	44 (73.3)	54 (83.1)	0.59
男子学生	27 (21.6)	16 (26.7)	11 (16.9)	
きょうだいの構成 弟妹が				
いる	64 (51.2)	29 (48.3)	35 (53.8)	0.59
いない	61 (48.8)	31 (51.7)	30 (46.2)	
身近に3歳までの子ども				
いる	20 (16.0)	9 (15.0)	11 (16.9)	0.81
いない	105 (84.0)	51 (85.0)	54 (83.1)	
中学や高校での保育体験実習で遊んだ経験				
ある	46 (36.8)	20 (33.3)	27 (41.5)	0.36
見学・なし	79 (63.2)	40 (66.7)	38 (58.5)	
乳幼児の世話のボランティアで遊んだ経験				
ある	35 (28.0)	18 (30.0)	17 (26.2)	0.69
見学・なし	90 (72.0)	42 (79.0)	48 (73.8)	
母性看護への興味				
ある	77 (61.6)	33 (55.0)	44 (67.7)	0.20
普通・なし	48 (38.4)	27 (45.0)	21 (32.3)	
子どもについて興味				
ある	92 (73.6)	44 (73.3)	48 (73.8)	1.00
普通・なし	33 (26.4)	16 (26.7)	17 (26.2)	

Fisherの正確確率検定

3. 実習前後の親性準備性得点の比較

親性準備性得点の実習前後の比較を表2に示す。実習後の得点は有意に高くなった ($p < 0.01$)。属性別では男子学生 ($p = 0.17$)、身近に3歳までの子どもがいる学生 ($p = 0.06$)、ボランティアで遊んだ経験がある学生 ($p = 0.11$)、子どもについての興味がある学生 ($p = 0.11$) の実習後得点は上昇したものの有意に高く変化しなかった。

親性準備性下位尺度である「乳幼児の好意感情」得点の実習前後の比較を表3に示す。実習後の得点は有意に高くなった ($p < 0.01$)。また、すべての属性において、実習後得点は有意に上昇した。

親性準備性下位尺度である「育児への積極性」得点の実習前後の比較を表4に示す。実習後得点は上昇したが有意に高く変化しなかった ($p = 0.21$)。属性別では女子学生のみ実習後得点は有意に高くなった ($p = 0.04$)。男子学生、弟または妹のいない学生、母性看護への興味のある学生、母性看護への興味のない

普通・なしの学生の実習後得点は低下した。身近に3歳までの子どもがいない学生は、実習前後で得点の変化はなかった。その他の属性では実習後得点は上昇したが有意に高く変化しなかった

VII. 考察

1. 対象者の背景

本研究では中学や高校での保育体験実習で遊んだ経験がある学生、乳幼児の世話のボランティアで遊んだ経験がある学生は30.0%前後であった。川瀬⁶⁾による社会心理学受講大学生163名に実施した調査では子育て体験をもつ学生は21.5%、宮良ら¹¹⁾の看護学生70名前後(実習前75名、実習後66名)への調査では42.6%と調査対象によるばらつきはみられるが、本研究の対象学生は2学年間の属性に有意な差もなく、一般的な青年期の大学生の集団であると考えられる。

表2 親性準備性総得点の属性別変化

		人数(%)	2学年全体 (n=125)		p
			中央値(25%, 75%四分位)		
			実習前	実習後	
総得点	全体	125	88(77, 96)	91(81,98)	<0.01
性別	女子	98(78.4)	89(81, 97)	94(85, 99)	<0.01
	男子	27(21.6)	77(69, 92)	83(67, 89)	0.17
きょうだい構成 弟または妹の有無	いる	64(51.2)	92(81, 98)	95(86, 100)	<0.01
	いない	61(48.8)	86(74, 93)	87(76,96)	0.03
身近に3歳までの子ども	いる	20(16.0)	92(85, 96)	93(89, 100)	0.06
	いない	105(84.0)	88(76, 96)	89(78, 98)	<0.01
中学や高校での保育体験実習の経験	遊んだ	47(37.6)	92(82, 98)	97(86, 101)	<0.01
	なし、見学のみ	78(62.4)	86(75, 95)	88(77, 96)	0.02
ボランティアの経験	遊んだ	35(28.0)	94(87, 99)	97(87, 101)	0.11
	なし、見学のみ	90(72.0)	86(75, 94)	88(77, 96)	<0.01
母性看護への興味	あり	77(61.6)	92(85, 98)	95(87, 100)	0.04
	普通・なし	48(38.4)	76(66, 88)	83(71, 93)	<0.01
子どもについての興味	あり	92(73.6)	92(85, 97)	92(86, 99)	0.11
	普通・なし	33(26.4)	70(61, 83)	76(66, 95)	<0.01

wilcoxonの符号付順位検定

表3 親性準備性下位尺度（乳幼児の好意感情得点）の属性別変化

		人数(%)	2学年全体 (n=125)		p
			中央値(25%, 75%四分位)		
			実習前	実習後	
乳幼児の好意感情得点	全体	125	41(34, 45)	44(36, 45)	<0.01
性別	女子	98(78.4)	43(35,45)	45(39, 45)	<0.01
	男子	27(21.6)	34(27, 41)	37(29, 44)	<0.01
きょうだい構成 弟または妹の有無	いる	64(51.2)	44(35, 45)	45(41, 45)	<0.01
	いない	61(48.8)	36(33, 43)	42(34, 45)	<0.01
身近に3歳までの子ども	いる	20(16.0)	44(37, 45)	45(41, 45)	0.02
	いない	105(84.0)	40(34, 45)	44(36, 45)	<0.01
中学や高校での保育体験実習の経験	遊んだ	47(37.6)	43(36, 45)	45(42, 45)	<0.01
	なし、見学のみ	78(62.4)	39(32, 45)	43(34, 45)	<0.01
ボランティアの経験	遊んだ	35(28.0)	44(40, 45)	45(43, 45)	<0.01
	なし、見学のみ	90(72.0)	37(32, 45)	43(34, 45)	<0.01
母性看護への興味	あり	77(61.6)	44(38, 45)	45(42, 45)	<0.01
	普通・なし	48(38.4)	34(27, 40)	37(31, 45)	<0.01
子どもについての興味	あり	92(73.6)	44(36, 45)	45(42, 45)	<0.01
	普通・なし	33(26.4)	31(22, 35)	34(29, 42)	<0.01

wilcoxonの符号付順位検定

表4 親性準備性下位尺度（育児への積極性得点）の属性別変化

		人数 (%)	2学年全体 (n=125)		p
			中央値(25%, 75%四分位)		
			実習前	実習後	
育児への積極性得点	全体	125	48(42, 53)	49(41, 55)	0.21
性別	女子	98(78.4)	49(43, 53)	51(42, 56)	0.04
	男子	27(21.6)	43(37, 50)	41(38, 50)	0.37
きょうだい構成 弟または妹の有無	いる	64(51.2)	50(43, 54)	51(42, 56)	0.12
	いない	61(48.8)	47(40, 52)	46(41, 52)	1.00
身近に3歳までの子ども	いる	20(16.0)	50(47, 53)	51(46, 58)	0.10
	いない	105(84.0)	47(41, 53)	47(41, 55)	0.58
中学や高校での保育体験実習の経験	遊んだ	47(37.6)	49(43, 54)	52(42, 57)	0.16
	なし、見学のみ	78(62.4)	46(41, 52)	47(41, 53)	0.63
ボランティアの経験	遊んだ	35(28.0)	52(45, 55)	52(44, 57)	0.57
	なし、見学のみ	90(72.0)	47(41, 52)	48(41, 54)	0.25
母性看護への興味	あり	77(61.6)	55(45, 54)	51(45, 56)	0.17
	普通・なし	48(38.4)	43(37, 49)	42(38, 51)	0.66
子どもについての興味	あり	92(73.6)	50(44, 53)	51(43, 55)	0.60
	普通・なし	33(26.4)	41(37, 47)	42(38, 55)	0.12

wilcoxonの符号付順位検定

2. 実習前の親性準備性得点

実習開始前の親性準備性得点は先行研究と比較のため平均値で示すと、実習開始前 85.1 ± 14.0 点 (M ± SD) であり、贄¹²⁾が看護学生実施した調査の 83.92 点、川瀬⁶⁾が社会心理学受講大学生に実施した調査の子育て体験のある学生 87.15 点、子育て体験のない学生 82.91 点と比較し本研究の対象学生は子育て体験が少ない学生が多いことを考慮すると高い傾向が示された。このことは学内での母性看護学教育で子育てのイメージを具体化することができていたのではないかと推測する。

属性の違いでみた結果、各属性の経験や興味のある学生は、普通・なしの学生に比べて高かった。親性準備性に関連する背景については、子育て体験や乳幼児と関わる体験を持つ学生は高い親性準備性を持っている⁶⁾ことが報告されており、本対象学生者も同様の結果であったと考える。「母性看護への興味がある」「子どもについて興味がある」学生の得点は、子育て体験や乳幼児と関わる経験を持つ学生と同等の得点を示した。母性看護への興味と親性準備性との関連を調査した研究は見当

たらないが、松岡らは、母性度が高い人は妊娠や育児についての関心が高く、肯定的な認識をもち子どもを好きであったことを報告している¹⁶⁾。また、松本らは、親性準備性の高い群は大学時代に自分を認めてくれる前向きな先生・友人・恋人・きょうだい・先輩・後輩という重要他者との出会いが影響すると報告している¹⁷⁾。大学での母性看護学教育や仲間と取り組む学習・演習が妊娠・出産・子育てのイメージを具体化させ、子どもへの興味が高まり、肯定的な認識となり、親性準備性に影響を与えたのではないかと考える。

3. 各属性の地域母子支援実習前後における親性準備性の変化

地域母子支援実習は、本対象学生の親性準備性得点を有意に高く変化させた。下位尺度では「乳幼児の好意感情」得点は有意に高く変化したが、「育児の積極性」得点は上昇したが、有意な変化には至らなかった。宮良らの小児看護学前後の調査では、子どもと関わることについて不安をもつ学生は実習前より実習後に増加している¹¹⁾ことを報告

している。また、唐田らの地域子育て支援実習の効果の報告では、学生は母親の具体的な不安や悩みを聞き、子育ての実態を実感として学ぶが、親となる発達過程を学ぶまでに至らない学生が多いことも報告されている¹⁸⁾。本対象者も初めての母子との接触体験となる学生が多く、母親は育児不安をもつことを前提として実習にのぞむ学生もみられた。表情が豊かで特定の人との愛着関係が深まり、自己概念や自己認識が発達する愛らしい乳幼児¹⁹⁾と触れ合うことで好意感情は抱きやすいが、自我の発達がみられ、我が出る乳幼児¹⁹⁾を育児する大変さも実感し、子ども中心の生活を送っている親が輝いて見えるのと同時に、育児に使う時間の多さや親役割の責任の重さを知り、育児の積極性にまでは至らなかったのではないかと考える。

属性別では男子学生、身近に3歳までの子どもがいる学生、ボランティアで遊んだ経験がある学生、子どもについての興味がある学生は実習後の親性準備性得点は有意な変化はみられなかった。周産期病院実習では、男子学生は出産後の年代の近い女性を受持ち生殖器に関する観察を行うことが多いことに羞恥心を伴い性差を意識することが報告されている¹⁹⁾。しかし、地域母子支援実習では子育てを通して母親と関わるため、男性の育児参画が推進されている現代において²⁰⁾、育児に対するイメージをもち、親性準備性が高く変化することを期待していたが、有意に高く変化することはなかった。佐々木²¹⁾は育児体験における親性育成効果に性差があることを心理・生理・内分泌学的に明らかにしており、男性は女性より乳幼児の泣きに対し緊張やストレスを感じやすいことを報告している。また、育児体験における初期段階では、性差を考慮した対応が必要であるが、親性は男女を問わずに発達することも報告している²²⁾。初めての乳幼児との触れ合いとなる学生が多い地域母子支援実習では、母子との関わりにとまどいがちな男子学生の緊張やストレスを考慮して、初日は母子との関わりの導入部分のサポートや実習後のカンファレンスでは学びの共有や当日の振り返りだけでなく、翌日への課題をグループ全体で考えていけるようなサポートを行い、男子学生の親性準備性を高める支援が必要であると考えられる。

身近に3歳までの子どもがいる学生、ボランティ

アで遊んだ経験がある学生、子どもについての興味がある学生は実習開始前より親性準備性得点が高かったが、実習後に有意に高く変化しなかった。高い親性準備性をもつ学生は、下位尺度の「乳幼児の好意感情」得点が実習前より43～44点(中央値)と高く、実習後は45点の上限となり、これ以上の変化は望めなかった。「育児への積極性」を高める経験をすることで更に親性準備性を高く変化させる可能性があると考えられる。川瀬の調査⁶⁾では子育て体験の有無と育児への積極性との間に有意な相関が認められなかったことを報告している。しかし、唐田らの地域子育て支援実習の効果において学生は、施設役割として、親子が成長できる場であり『子どもが成長していくのと同時に、親も親として一緒に成長していける場ということが理解できた』ことを報告している¹⁸⁾。日々の実習終了前の振り返りカンファレンスでは、母性看護学実習としての目標を達成するために、子どもに目が行きがちな学生に対し、母親を中心とした学生の学びの共有やそれぞれの地域での母子へのサポートの実態を指導者より学ぶ時間を設けている。その中で自身が関わった母親との会話や表情を振り返り、子育ての大変さだけでなく、親として子どもとともに成長している姿を学べた学生と、短期間の実習では、児への好意感情が芽生えても、子育ての現実の受容までいかなない学生が存在したのではないかと考える。羽田野は自己への自信や信頼が育児への積極性につながることを報告している²³⁾。「育児の積極性」得点が上昇した学生とそうでない学生の実習経験での違いを更に検討し、自己の実習体験に自信がもてるような声かけや、思考ができるような介入が必要であると考えられる。

4. 各属性の地域母子支援実習前後の親性準備性得点の変化

どの属性に着眼して地域母子支援実習指導を行うことが効果的であるかを検証した。性別、子どもへの興味がある学生と普通・なしの学生、母性看護に興味がある学生と、普通・なしの学生は実習前の親性準備性得点に差が大きい属性であった。実習開始前から親性準備性が高い学生にとって、地域母子支援実習での経験は親性準備性が高くなることに影響する子育て体験や乳幼児との接触体

験と類似した経験であり、交互作用は有意にならず、緩やかな変化となったと考える。しかし、興味が普通・ない学生は実習前得点が低く、地域母子支援実習の経験が親性準備性得点を大きく変化させた。対象学生達は1990年代の少子化が進んだ頃に出生し、少年期である2005年には合計特殊出生率が過去最低値の1.26²⁴⁾になるという社会環境で育っている。身近で乳幼児に会う・見る機会が少なく、学内での母性看護学教育では子育てのイメージを具体化できず、子どもへの興味、母性看護に興味をもてない学生が存在したと推測する。しかし、地域母子支援実習での表情が豊かで特定の人との愛着関係が深まり、自己概念や自己認識が発達する愛らしい乳幼児²⁵⁾と触れ合う経験は、乳幼児への好意感情を抱き、親性準備性が低い学生の親性準備性得点を高く変化させたと考える。親性準備性が低い学生にとって、周産期病院実習前に地域母子支援実習を行うことは、母子への苦手意識が軽減され、効果的な周産期病院実習につながると考える。

Ⅷ. 結論

地域母子支援実習は看護学生の親性準備性の「乳幼児の好意感情」を高く変化させたが「育児への積極性」を高く変化させるには至らなかった。属性では学生の性差、子どもや母性看護への興味の有無に着眼した関わりが必要である。今後、どのような経験が親性準備性得点を高くするのか更なる検証が必要である。

Ⅸ. 研究の限界と課題

本研究では、実習開始前調査は全員同時期に実施したが、実習後調査は実習ローテーションにより地域母子支援実習前に小児領域で保育所実習を行った学生もあり、実習後調査時には子どもとの接触の経験値に違いがあった。また、グループにより実習施設が異なり実習体験に違いがあることだけでなく個々の学生のレディネスの影響や、実習直後の調査のため一時的な効果の可能性もある。そのため、得られた結果を一般化するには限界がある。今後の課題としては、継続した調査の実施やどのような経験が親性準備性に影響を及ぼすか

について深める必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様、実習施設指導者の皆様・母子の皆様に感謝いたします。

(本研究の一部は第50回日本看護学会—看護教育—学術集会において発表した)

本論文内容に関連する利益相反事項はない。

【文献】

- 1) 全日本病院協会, 医療行政情報(2017): 母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について, 2019年8月14日閲覧,
https://www.ajha.or.jp/topics/admininfo/pdf/2015/150908_8.pdf.
- 2) 新道幸恵, 和田サヨ子: 母性の心理社会的側面と看護ケア, 第1版; 110, 医学書院, 1990.
- 3) 文部科学省: 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会—看護教育モデル・コア・カリキュラム案 2016, 2019年8月14日閲覧,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf.
- 4) 佐々木綾子, 竹 明美: 青年期の親性準備性の概念分析, 日本母子看護学会誌, 11(2); 9-17, 2018.
- 5) 大橋幸美, 浅野みどり: 親性とそれに類似した用語に関する国内文献の検討—親性の概念明確化に向けて—, 家族看護研究, 15(1); 56-64, 2009.
- 6) 川瀬隆千: 大学生の親準備性に関する研究, 宮崎公立大学人文学部紀要, 17(1); 29-40, 2009.
- 7) 小長井春雄: 思春期保健福祉体験学習事業の前校長里その評価, 厚生省心身障害研究会 効果的な親子のメンタルヘルスケアに関する研究; 306-13, 1996.
- 8) 日隈たまえ: 男子学生の母性看護学実習前後における性役割変観の変化. 神奈川県立看護教育大学校 看護教育研究収録. 28; 138-45, 2003.
- 9) 井田史子, 前田隆子, 鈴立恭子, 他: 幼児教育保育学科学学生の乳児保育実習による親性準備性の

- 変化. 鳥取短期大学研究紀要, 73; 1-9, 2016.
- 10) 宮良淳子, 神徳律子: 小児看護学学習前の学生が持つ対児感情と親性準備性. 中京学院大学看護学部紀要, 3(1); 29-41, 2013.
 - 11) 宮良淳子, 高田理衣: 看護学生が持つ対児感情と親性準備性—小児看護学実習前後の変化—. 中京学院大学看護学部紀要, 6(1); 63-72, 2016.
 - 12) 贅育子, 中川名帆子: 母性看護学実習前後における女子大学生の親準備性の変化に関する実態調査. ヒューマンケア研究学会誌, 7(2); 55-61, 2016.
 - 13) 佐々木綾子: 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討. 福井大学医学部研究雑誌, 8(1.2); 41-50, 2007.
 - 14) 厚生労働省: 健康日本 21 (総論), 第3章基本戦略, 2018年10月1日閲覧, https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/kenko21_11/s0.html.
 - 15) 戸田(青木)まり: 母性準備尺度(1988), 心理尺度ファイル; 380-383, 垣内出版, 1994.
 - 16) 松岡治子, 和田佳子, 花沢成一: 青年期男女における母性度・父性度の発達に関連する要因の検討—親性準備性の研究(II). 日本母性衛生学会誌, 41(4); 500-505, 2000.
 - 17) 松本奈巳, 重橋のぞみ: 青年期女性における親性準備性と重要な他者との関連. 福岡女学院大学大学院紀要 臨床心理学, 15; 15-22, 2018.
 - 18) 唐田順子, 大賀明子, 畑野花奈: 地域子育て施設実習を組み入れた母性看護学実習の教育プログラムの効果—学生の長期的な視点を育むための試み—. 日本母性衛生学会誌, 56(4); 667-76, 2016.
 - 19) 瀨瀬祐子, 中田 久恵, 大槻 優子: 男子学生の母性看護学実習開始時における心理状態に関する研究. 日本医学看護学教育学会誌, 26(1); 22-26, 2017.
 - 20) 内閣府男女共同参画局(2016): 男性にとっての仕事と家事・育児参画, 2019年8月15日閲覧, http://www.gender.go.jp/policy/men_danjo/kiso_chishiki2.html.
 - 21) 佐々木綾子, 小坂浩隆, 末原紀美代, 他: 親性育成のための基礎研究(2)—青年期男女における乳幼児との継続接触体験の心理・生理・脳科学的指標による男女差の評価—, 日本母性衛生学会誌, 51(2); 406-414, 2010.
 - 22) 佐々木綾子, 末原紀美代, 町浦美智子, 他: 青年期の親性を育てる「乳幼児とのふれあい育児体験」の男女差に関する研究—心理・生理・内分泌学的 指標による検討—, 福井大学医学部研究雑誌, 8(1.2); 17-29, 2007.
 - 23) 羽田野花美: 大学生男女の親性準備性に性役割および信頼感が及ぼす影響, 思春期学, 25(2); 252-259, 2007.
 - 24) 内閣府(資料: 厚生労働省 人口動態統計): 出生数及び合計特殊出生率の年次推移, 2019年11月1日閲覧, <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/shusshou.html>.
 - 25) 奈良間美保, 丸光恵, 堀妙子, 他: 小児の成長・発達, 小児看護学概論小児臨床看護総論, 第12版; 84-116, 医学書院, 2012.

Abstract

Purpose: To identify the related between changes and attributes in students' readiness for parenthood after training in maternity and childcare in the community in maternal nursing practice.

Method: A longitudinal survey was conducted to investigate readiness for parenthood among 60 in 2017 and 65 in 2018 third-year undergraduate nursing students before and after training. We compared the total score of 22 items The Readiness of Parenthood Scale and the subscales "the affection towards babies", "the child-rearing drive" before and after training for each attribute.

Results: The readiness of parenthood score before training in maternity and childcare in the community was significantly higher after the training. The male student's the readiness of parenthood score increased after the training, but there was no significant change. On the subscales, the scores for "affection towards babies" changed significantly for all attributes, but the scores for "the child-rearing drive"; did not changes significantly except for female students.

Discussion: It was suggested that training in maternity and childcare in the community develops the readiness of parenthood of nursing students. In attributes, It is necessary to provide guidance that focuses on gender, interest in children and maternal nursing in students.

Keywords : readiness for parenthood, maternity nursing training, parenting support